

震災支援の後追い調査

(特非) シビルNPO連携プラットフォーム
理事・地方創生検討会座長
つながり・ぬくもりプロジェクト東北 幹事三井 元子



4月15日、熊本が未曾有の大地震の被害を受けている時、私は、東日本大震災の被災地である南三陸町にいた。災害のあった2011年の4月4日、NPO法人エコロジー夢企画とぐるっ都地球温暖化対策地域協議会（共に代表：三井）は、23の協力団体と共に「東日本大震災～自然エネルギーで被災地支援～つながり・ぬくもりプロジェクト」を立ち上げ、2016年までに総額で約1億円の寄付金や助成金を集め、支援活動を行った。丸5年を経て、その支援の検証をするため、幹事団体と共に南三陸にいたのだ。

被災当時、南三陸町（志津川）の人々は、津波ですべてを流されて、それぞれが各地区の生活センターに避難していた。私たちは、電気もガスも来ていない地域に自然エネルギーでの支援を開始したが、自治体に連絡をとっても、いったいどこがそれを必要としているか把握しきれないとの回答があった。そこで、私たちは草の根で情報を集め、週1回は東京中野区に幹事団体の代表が集まり、優先順位を決定し支援を行っていった。南三陸戸倉地区は、WWFジャパンが情報を集めてきた箇所だった。まず、地区の方たちが避難していた生活センター2か所と少し高台にあったために難を免れた民宿津の宮荘に、太陽光発電400wによる電灯を設置し、その後、復興を開始するために建てることになった漁協事務所の屋根の上に10kwの系統連系の太陽光発電を設置した。戸倉中学校が避難していた登米市善王寺小学校体育館には、太陽光発電による電灯と太陽熱温水器によるお湯を寄贈・設置したのだった。

この4月15日早朝、養殖銀サケの初出荷があるということで見学にいった。過密漁業を改め、少ない生簀で養殖を開始したところ、年々漁獲量が上がっていると漁協幹部が話してくれた。昨年は6t、この日は8.4tの漁獲があった。ベルトコンベアーを使っの仕分けは、5年ぶりということで、サケを待つみんなの笑顔がまぶしかった。

カキに至っては、このことで縁のできたWWFのアドバイスを受けて、震災前にカキの成長不良や品質低下を招いていた過密状態での養殖をやめ、「量」から「質」への転換を図り、海の環境保全と地域の人々の暮らしにつながる「責任ある養殖業」の実現を目指して再興。日本で初めて牡蠣のASC（水産養殖管理協議会）の認証を取得した為、世界にも流通が可能になったと、誇らしげに話してくれた。被災地支援が良い形で実を結んでくれた。

そのあと、私たちは海水に浸かってしまった漁村、石巻市尾崎地区で太陽光発電400wを設置した漁村の10数軒を訪問。設備は今も大切に使われていた。福島の子どものための保養施設として活用された「手のひらに太陽の家」（登米市）では、太陽光発電7kwと太陽熱温水器9基が、大幅な燃料費の節約につながっていると感謝された、ほんの少し肩の荷が下りたように感じて岐路についた旅であった。



日本初 ASC 認証
の
戸倉のカキ



養殖銀サケの初出荷に沸く
戸倉漁協



400wの太陽光パネル



7kw 太陽光パネルと9基の太陽熱温水器を寄贈・設置した登米市の「手のひらに太陽の家」